

コスモ・スワール うすだ

一人一人が輝き つながり 未来を拓く

「明日で終わっちゃう。」

運動会を翌日に控えた午後。グラウンドや体育館では、5・6年生が来賓席を整え、競技の道具を運び、放送やゴールのリハーサルに汗を流していました。学校という大きな場が、一つの行事に向かって静かに、しかし確実に熱を帯びていく時間です。

その傍らで、声を張り上げ、最後の練習に励む応援団の姿がありました。本校の応援団は、子どもたちの「やってみたい」という意志で集まった有志たちです。運動会の特別時間割が始まって以来、2時間目の休み時間になるたび、どこからともなく力強い声が響き、汗にまみれて練習を重ねる子どもたちの姿がありました。その表情は、日に日にたくましさを増していったように思います。そんな中、私はある5年生の子どもに目が留まりました。この2週間、誰よりもその表情を劇的に変化させてきたお子さんです。

「いい表情になったね。いよいよ明日だね」

通りすがりにそう声をかけた私に、そのお子さんはふと、こう返したのです。

「明日で終わっちゃう」

私の胸は、トントンと激しく揺さぶられました。

通常、運動会といえば「当日」が本番であり、ゴールのはずです。しかし、この子にとっての運動会は、仲間とともに歩み始めたその日から、すでに濃密に始まっていたのでしょう。「明日で終わっちゃう」という言葉は、みんなで必死に駆け抜けてきたあの泥臭い毎日が、あまりにも愛おしく、楽しかったという、プロセスへの最大の賛辞にほかなりません。

そして彼が惜しんでいる「終わり」とは、行事そのもののことだけではないはずです。一つの目標に向かって、時にぶつかり、時に支え合いながら、みんなで本気になって関わり合ってきた「特別な関係性の時間」が終わってしまうことへの、切なさ。学校という、多様な他者がひしめき合い、折り重なるようにして生きる場所だからこそ分かち合えた、あの心地よい一体感をもっと味わっていたいという、関係性の確かな成熟がそこにありました。

私は、この言葉をただの「寂しさの吐露」としては受け取りません。そこには、これまでの日々への絶対的な肯定と、「明日は最高の日にするんだ」という、寂しさを内包した最高にポジティブな覚悟が詰まっている。そう深く価値づけ、愛おしく思ったのです。

一人では決して届かない場所へ、仲間がいるからこそ、学校という場だからこそ、たどり着くことができる。このお子さんの眩きこそが、本校の目指す「過程を大切にする運動会」の、何より美しい具体の姿でした。

PTA 作業ありがとうございました。

運動会を控えた5月24日の日曜日。6年生の保護者の皆様とPTA役員の皆様が、温かな汗を流してくださいました。今回は運動会の設えに加え、新たに「プール清掃」も担っていただきました。「プール学習の期間を長くしてほしい」という昨年度の願いを受け止め、2週間前倒した試みです。同時に生じる子どもたちの安全面への懸念から、作業に盛り込んでくださったのでした。

学校という場は、教職員の力だけで成り立つものではありません。保護者の皆様が学校全体のことを我が事として想い、動いてくださることで、子どもたちの安心な舞台が美しく設えられていきます。運動会後の片付けも含め、これほどまでに心と体を動かして支えてくださる臼田小PTAの皆様に、心から深く感謝申し上げます。



手前味噌ながらよろしいですか？

運動会プログラム第8番、1年生による個人走「よ〜い ドン!」。ちいさな1年生たちが、小さな身体いっぱい腕を振り、目の前のゴールを目指して、ただひたむきに地を蹴って走り出していきます。その微笑ましくも必死な姿を本部席から見守っていたとき、ふと、視界の端が大きく波打ちました。

本来のプログラムには、そこにいるはずのない応援団の姿があったのです。

それは、誰かに指示されたわけでも、段取りにあったわけでもありません。目の前で一生懸命に走る1年生の姿を前にして、文字通り「応援したくなってしまった」応援団の有志たちが、心の底から湧き上がる衝動のままに、自発的に駆けつけて始めた応援でした。応援したいから、応援する。そんな子どもたち「有志」の姿は、グラウンドに立つ何よりも美しい「勇姿」として涙と共に私の目に映りました。

自分が目立ちたいからやるのではない。誰かに褒められたいから動くのでもない。子どもたちの行動の源泉は、完全に「他者」のなかにありました。ただこの場を、運動会をみんなで盛り上げたい。今走っているあの子どもたちにエールを届けたい。学校という、他者と共に生きる場所だからこそ耕された、美しい心根がそこに溢れていました。

そして同時に、私はその光景を包み込む「教職員の眼差し」に、深く揺さぶられたのです。

学校という場では、時に「全体の進行」や「予定通りに進めること」が優先されがちです。しかし、この予定にない子どもたちの自発的な行動を見たとき、本校の職員は、誰一人として頭ごなしに止めに入ったり、やめさせたりしませんでした。

それは、単なる放任ではありません。教師たちが子どもたちの動きをじっと見つめ、その行動の奥底にある「他者を想う心の優しさ、温かさ」を瞬時に見取り、受け止め、信じて委ねた瞬間でした。子どもたちの姿から価値を汲み取り、共にその場を肯定していく――。教師たちのそんな柔らかな感性と営みがあって初めて、あの「有志たちの勇姿」は、学校全体の幸福な空気へと昇華されたのです。

手前味噌ですが、あえて言わせてください。臼田小学校は本当に素敵な学校です。

子どもと大人の心が響き合い、予定調和を超えたドラマが生まれるこの場所で、私たちはこれからも、子どもたちの「心が動く瞬間」を大切に、丁寧に、並び見ていきたいと思うのです。



「しみじみ清掃旬間」の姿から見えた ～姿指先がひろった、沈黙のなかの輝き～

6月4日から、清掃委員会が企画した「しみじみ清掃旬間」が始まりました。日頃の清掃のあり方を振り返り、自らの心と向き合い直す時間です。その旬間の最中、美しい光景に出会いました。

昇降口を掃除していた2年生のお子さんです。その子は、図書館の入り口にある扉のレールの溝に、右手の人差し指をそっと滑らせていました。何度も、何度も。ホウキでは決して届かないその細かな隙間から、指先が丁寧にゴミをかき集めていくのです。

公共の場では、時として大人の私たちでさえ、汚れに気づきながら見ないふりをしたり、他者に勝手に委ねたりしてしまいがちです。しかし、このお子さんにはそんな躊躇など微塵もありませんでした。汚れと、そして自分自身と、まっすぐに向き合っているのです。

やがて終わりの音楽が鳴り、一通り掃除を終えたその子が腰を上げたとき、その顔には実に爽やかな表情が浮かんでいました。そこには、やらされているという使役的な活動ではなく、自ら進んで取り組んでいるという自発的な活動からの充実感でした。

「シーンとした中で、見えにくい汚れも、時間いっぱい、磨こう」

私は、このお子さんの姿から、学校という、みんなで生きる場所を「しみじみ」と静かに愛おしむ臼田小学校の清掃のあり方を、その小さな指先が見事に体現してくれているような気持ちになったのです。

